

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.34 普通にできた はずなのに

「有難うございました。」

「お世話になりました。」

山部と友子が代わる代わる担当の看護師や理学療法士の渡部に頭を下げリハビリ病院を後にした。

「あの時はどうなるかと思ったわ。」帰宅するタクシーの中で友子が山部に話しかけた。

「自分でも何が何だかわからないうちに頭の中で思考が前に進まないというか、気がつけば元のところに戻っていて、これではいけない、集中してもう一度。と思うのだけれどやはり元のところに戻っていて。あっという間にそのサイクルが短くなって、意識がなくなっていた。記憶が戻りかけた頃には身体が鉛の板に埋め込まれているみたいで、そして意識がはっきりした時に悟った。神経を持って行かれた…と。

でも、私はラッキーだった。杖も使わずに歩けるように回復したし、

手だって自由に使える。神様はまだ私を見捨ててはいなかった。これからは血圧もきちんとコントロールしないと。次の発作がいつ来るかわからないから。うちにはまだ、養わなければいけない佳奈がいるから。佳奈はいくつになったかな？」

「嫌だわ、子供の年を忘れるなんて。高校2年生、17歳よ。」

「大学を卒業するのが22歳だから、それまでは頑張ってお金を支えないとな。後何年だ、22 - 17だから…。22 - 17だから…。22 - 17だから…。」

「しっかりしてよ。5年でしょ。あなたも仕事の事ばかりでなく、これからは自分の健康も気をつけてね。」

退院して一月にもなる。再診察で崎田医師の前に座った山部が尋ねた。「先生、身体の調子はいいんです。歩いてもこけることがなくなりました。手も自由に使えます。ただ、何となく感じていたのですが、簡単な計算ができません。わからないのではなく、できないのです。」

「軽度の高次機能障害ですね。他に2つの事を同時にできますか？」

「実は…。病気になるまでは普通に出来てたはずなのですが、今は同時進行ができなくなりました。」

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一